

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第759号 平成26年6月26日

議員の品格（2）

塾頭通信を書いていて、時々難しいと感じるのは、一つのテーマを取り上げるタイミングです。原稿を用意している内に事態が動いてしまい、その原稿をボツにしたこともあります。一昨日「議員の品格」と題して通信をアップしましたが、皮肉な事に、原稿を担当スタッフに送ったその日に、「セクハラ野次」を放ったのは自分だと鈴木章浩議員が名乗り出たというニュースが飛び込んで来て、何と間の悪い事かと感じています。

さて、私は「議員の品格」という一文の中で、「問題がどんどん大きくなって、名乗り出たくても名乗り出られない、といったところかも知れないが、首をすくめて風が過ぎ去るのを待っている、そんな議員に政治家としての品格があるとは思えない」と述べると共に、「問題なのは野次を飛ばした当人だけではなく、それを面白がって笑った同僚議員の存在であり、議会内部で、しっかりとこの問題に決着を付けようとならないのは、野次に共感している議員が少なくないという事かも知れない」と指摘したところでした。

そう書いた時の気持ちは、「セクハラ野次」の当事者が名乗り出た今も変わりません。むしろ、「セクハラ野次」問題の根深さを改めて感じさせられましたので、しつこく「議員の品格」第2弾を書く事にしました。

鈴木議員が名乗り出たというのは、追い詰められ、仕方なくという感じがします。名乗り出なければもっと事態は悪くなるという計算が働いたのでしょうか、塩村議員に頭を下げたからといって、この問題は簡単には収まらないでしょう。

鈴木議員は、野次問題が発生した2日後、マスコミから「セクハラ野次」について聞かれた際、「寝耳に水」と関与を否定すると共に、「セクハラ野次」は議員辞職に匹敵するかとの質問に対して「そうですね」と応じたそうです（6月24日付読売新聞他から）。

鈴木議員は、「様々な話が一緒になって報道されている中で、名乗り出る機会を逸した」と述べているようですが、お粗末の限りです。

また、議員辞職に匹敵する問題だとの認識を示していたにもかかわらず、自民党会派からは離脱したものの、辞職する意思はないようです。こうして見ると、彼は、政治家としての発言の重さを全く理解していないとしかいいようがありません（もっとも、政治家の発言の軽さは彼に限った事ではなく、日本の政治家に蔓延してい

る病気かも知れないのですが)。

「早く結婚した方がいいんじゃないか」と野次を飛ばした事について、鈴木議員は「少子化、晩婚化の中で、塩村議員に早く結婚して頂きたいという軽い思いで」発言したと釈明していますが、塩村議員にしてみれば「余計なお世話」でしょうし、仮にそういう気持であったとしても、そんな事を議会という公式の場で発言するというのは、理解に苦しみます。

特に、鈴木議員の釈明を聞いていて非常に問題だと思っているのは「誹謗するつもりはなかったが、様々な理由で結婚できない方への配慮が欠けていた（6月24日付読売新聞から）」という発言です。

「誹謗する」、それ程の悪意が鈴木議員にあったとは、私も思っていません。そもそも、鈴木議員がそれ程の覚悟を持って発言したとは到底思えないからです。

ただ、鈴木議員の発言には、隠しても隠し切れない本音が覗いています。つまり彼は、男はこう、女はこうあるべきといった、いわゆる男女の役割を固定的に考えているのではないかと思います。

「様々な理由で結婚できない方への配慮が欠けていた」という発言の背景には、「女は結婚するのが当然」という意識があるのだと思いますし、そうした固定的な考えに同調する人も少なくないと感じます。「セクハラ野次」に笑い声が上がったというのは、その事を良く示しています。

若い男女が出合い、結婚し、明るい家庭を作って行くというのは素晴らしい事だと思っていますが、夫婦の形は様々であり、こうしなければならぬと押し付ける事は出来ません。また、子どもが欲しくて、肉体的、経済的な負担に耐えながら不妊治療をしている夫婦も少なくないのです。

そういう意味からすれば、鈴木議員が謝るべき相手は、「様々な理由で結婚できない方」だけではなく、女性全体に対してではないのかと、私は思っています。

また、「セクハラ野次」は、鈴木議員だけではないはずで、これから先の犯人探しは難しいかも知れませんが、まずは、「セクハラ野次」を飛ばした本人が、きちんと名乗り出て謝罪すべきです。(塾頭：吉田 洋一)